

図書館の徹底活用術②

利用者にとって有益な学習支援者としての図書館サービスの質的側面が伝承されるプロセスへの着眼
：ドロシー・レナード (Dorothy A. Leonard) 『経験知』を伝える技術：ディーブスマートの本質』を巡って
枝元 益祐

皆さんの学習支援の為に、図書館サービスの有用な活用方策についての近接領域を毎回紹介しています。今回は、これまでの言及内容をトレースする形態に従いながらも、ドナルド・ショーン (Donald A. Schön)が提唱する「行為の中の省察」の観点から学習支援に於ける「対話」の重要性に関する捉え方を下敷きにして図書館でのサービスを念頭に置いて利用者に提供されるサービスの質的な側面に着眼しました。

このことは、「対話」そのものを学習経験として位置づけて、その経験が生成する「行為の中の省察」を支援する図書館サービスの在り方を提示しました。このような「対話」の捉え方を巡っては、ブルーナー (Bruner)の『可能世界の心理』にて著された「論理実証モード」と「ストーリーモード」を下敷きにした「内面行為としての省察」や、バフチン (Bakhtin)の言う「対話」を通じた学びへの経験、そして、ペスタロッチ (Pestalozzi)が言う生活の中の経験を通じた学びなどにも共通する部分があります。

古代ギリシャの哲学者ソクラテスは、教え子たちに質問をして答えさせる対話型の教育方法の方が一方的に知識を伝えるよりはるかに効果的であることに気づきました。このソクラテスマソッドと呼ばれる教育方法は、産婆術とも呼称されていますが、アメリカの小学校の教育課程をはじめとして、その後のロースクールやビジネススクールで学生の思考力を磨く狙いで取り入れられているメジャーな教授方法です。このソクラテスマソッドの特徴は、積極的に聞く以上のことを生徒に要求することにあります。第一に、曖昧な言葉や思考を明確化・精緻化することが求められます。第二に、自分自身の固定観念に疑問を投げかけ、根底にある現象についてもっと深く考えることが求められる。このように、ソクラテスマソッドは充実した積極的な経験になります。

この意味に於いて、図書館で展開される学習支援のスタンスと類似していると言ったことが出

来ます。このソクラテスマソッドが極めて効果的なのは、学習者が積極的に学習過程に関わり、自分の思考を明確化させ、固定観念に疑問を投げかけるからだと言ったことが出来ます。

しかし、これら一連の研究は個人をその対象としていると言った側面が強く滲み出てしまっています。そこで前回予告したように、これらの内面的且つ質的、換言すると、人々の日常生活の中に存在する経験を通じた活動、謂わば、学びへの実践活動と言った可視化できない内実がどのように他者に伝播、或いは、継承されていくのかと言った個人的、若しくは個人の成長をターゲットとする側面が強調されている傾向が現状であり、集団的且つ組織的な成長にアプローチしようとする試みは脆弱であると言ったことを指摘することができます。

ここに着眼したのが、マイケル・ポランニー (Michael Polanyi)の『暗黙知の次元』で言及されたことに類似した知の側面を捉えた概念を提唱した、ドロシー・レナード (Dorothy A. Leonard)であると言ったことが出来ます。彼はその著書『「経験知」を伝える技術：ディーブスマートの本質』に於いて、職業も含んだ生活経験で展開される実践活動から生成する「経験知」に着眼しています。これは「暗黙知」と同様に、可視化された「形式知」と対照されることで浮かび上がる知の在り方として措定されています。そしてこの「経験知」が他者へ伝承されるプロセスに関して言及しているのですが、その際に重要になるのが、ディーブスマート (Deep Smarts)として人間の内面に根ざした「匠の技」のようにミメシスとして身体化され会得された知の在り方に焦点を当てています。

今回は、このDorothy A. LeonardのDeep Smartsを周辺の経験学習と関連させて更に考察を加えていきます。

えだもと ますひろ (准教授・図書館学・教育学)